
騎士なんて冗談じゃない！

西園 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士なんて冗談じゃない！

【Nコード】

N6516R

【作者名】

西園 葵

【あらすじ】

剣と魔法の異世界で騎士になりたくない青年が奮闘する物語。
青年の意思とは裏腹な方向へ動いていく世界。

青年を無理やり騎士へと導く数々の人達。

運命は青年を騎士にさせたがっている！？

「騎士なんて冗談じゃない！ 死んだほうがマシだ！」

果たして青年はその意思を貫くことが出来るのか。

コメディを書くのは初めてだったり…… よろしく願います。

第一話 表向き騎士を目指す

果てしなく広がる蒼穹をゆったりとした速度で白い雲が流れている。

なんともうらやましい限りだ。叶うならば、俺はあの空に流れる雲になりたい。

「いいか、ルシアよ。もう一度言わせてもらおう」

しかし哀しいかな。そんなことを考えても雲にはなれない。なぜなら俺は人の身。どうしても雲に成りえるというのだろうか。

「お前はこのヴァンレイン家に生まれた嫡男なのだ。我らが一族は代々王に仕えてきた騎士の一族だ。弟達の活躍は耳に新しいだろう。長男たるお前は何も思わんのか？」

ああ、自由気儘に生きたい。この牢の格子のような窓ガラスを蹴破って外に飛び出したい。

……いや、いつそそうするべきだろうか？ ああ、そうするべきだ。神もそう言ってる、多分。

「だからな、此度行われる『姫護^{ひめもじ}』の選定に推薦……………っ聞いているのかルシアー！」

腹に響くような厳格な声が部屋中を震わせる。五月蠅い。

窓の外を眺めているのを見逃してくれてはいたが、流石に窓に近づこうとしたのは駄目だったらしい。

俺はしぶしぶ五月蠅い部屋主に体を向ける。いかにもなヒゲを蓄えた恰幅のいい男が、高そうな木製の机に手について牙を剥き出し

にしている。猛獣かあんたは。

「オヤジ殿、時に落ち着け。持病の心臓病が悪化するぜ」

「う、すまんつい……って持病なんざ持っとらんわ！ デタラメを抜かすな！！」

バンツ！！ と、勢い良く両手を机に叩きつける猛獣男の名はガルア・ウォー・ヴァンレイン。

ヴァンレイン家の当主であり、俺の実の父親でもある。

このエルヴェディーレ王国では英雄と名高い……らしい。実はよく知らない。知ろうとも思わない。

「チツ、持ってねえのかよ。なんだったらいざって時の為に俺がこしらえてやろうか？」

そんな冗談を口に行っているのがこの俺、ルシア・ウォー・ヴァンレイン。

何を隠そうこの家の跡取り息子だがやる気が無い。先ほどオヤジ殿は騎士の一族と言ったが俺は違う。

俺の職業はなんと魔導師だったりする。幾つか魔道書を世に出してはいるがことごとく禁書指定される不運の持ち主だ、きつと。

「何がいざって時だ。お前の場合は本当にやれそうで怖いわ。……ふーっ、さてどこまで話したかな」

なんだオヤジ殿。とうとうボケたのか？

「『大地に還りたい』って呟いたあたりからだったかな」

「そんなネガティブ発言は誰も言っとらんわ！！ おほんっ、そうお前を姫護の選定に推薦したことだ」

「……覚えてんじゃねえかこの肉ヒゲダルマ」

『姫護』。そういえばそんなことを言っていた気がしないでもない。

姫護とは読んで字の如く、姫を護る者だ。この国独特の習慣であり、騎士に生まれついた者の最高荣誉だとか言われている。

競争率は当然高く、国中の騎士達が名乗りを上げるくらいだ。

姫護に付けるのは姫一人につきたったの一人。いうなれば選定が行われた代の最強の騎士が着く地位だ。それ故にいかなる場合でも姫護は完璧を求められる。

武はもちろんのこと。知勇、愛国心、果ては運すらも。

俺の着きたくない地位ランキング第一位を例年維持し続けている地位だ。

それにこの肉ヒゲダルマは推薦したというのだ。田舎の屋敷に引き籠っている俺を、王城へと引き摺り出すために！ 普通ならここで『なんてことしてくれたんだこの腐れ田舎領主、手前の頭からつま先までそれぞれの部位ごとに分けた悲惨な呪いの魔法をかけてやる』とでも吐き散らしているところだ——だが！

「いいぜ、行つてやるよ」

「誰が肉ヒゲ……なんだと？」

「だから、王城に行きゃいいんだろ？ んで姫護の選定に顔を出すつと」

「……明日は天変地異が起こるな」

「ひでえ言い草だな、おい！」

このルシアに秘策あり！ そう至極簡単な事だ。姫護の選定は国中のお強い騎士様達が馳せ参じる一大行事。英雄と謳われたガルアの息子が参加してもさほど注目なんざ受けんだろ。そう、そして……皆強力な騎士のうえにやる気十分な奴らばかり。

負けて相手がスゲエ奴だったで終わりさ！

ククク……、フハハ……、ハアッーハッハッハッハー！

完璧だ。適当なとこまでやって後は勝ちを譲ってしまえばいいのだー！！

まあ本気出して負ければそれに越したことは無い。っていうかそちのほうが高確率高そうだ。剣握ったの何年前だっけかなー。

「ルシア……楽しそうだな」

「ああ楽しい、楽しいとも。これでオヤジ殿の無駄な苦言が無くなると思うと俺は……もう……！」

「分かった分かった。とりあえず明日にはここを出る。馬車は用意してあるから心配するな」

「今から荷造りしろとオヤジ殿は仰るか」

なんて家畜……じゃなかった鬼畜野郎だ。

「お前なら魔法ですぐだろう。気まぐれなお前のその勢いを殺させないためだ」

まあそうなんですけどね。しかし気まぐれとは何たる言い草。

俺ほど真っ直ぐな人間はいないと言うのに。

まあしかし、そんな言葉もどうでもいい。どうせなら王都に住処でも見つけるか。この館は居心地が良いが所詮はオヤジ殿の持ち物。真に俺の空間を作るには一から始めるべきだ。そうだ、是非そうしよう。

「あーはいはい。従いますよー従いますー。でもよ、姫護になれなかったからって後で愚痴愚痴言っなよ？俺も本気の本気、全身全霊で立ち向かうが天下無双の最強騎士が降臨なされたら俺も鎧袖一触だろうからよ！」

「はあ、さつさと部屋に戻れ」

「了解しました將軍殿ー！」

「やれやれ……」

俺は意気揚々と自室兼研究室に引き上げ荷を整えた。と言っても魔法で作った空間に仕舞うだけだったので本当にすぐだったが。

第二話 王都に到着

雲ひとつ無い快晴の空を俺は見上げた。いやはや、なんと素晴らしい天気だろう。天も俺の新たな門出を祝ってくれているに違いない。

俺の現在地はエルヴェディーレ王国の中心地、王都デルヘンにあった。

馬車での道中は何事もなかった。それもそのはず。現在この国は平和そのもの。盗賊など居るはずもなく、獣も街道には姿を現さない。うむ、平和万歳。ラブアンドピース。

そんなこんなで俺は懐かしいこの都に立っている。俺も幼い頃はオヤジ殿に連れられてよく訪れたものだ。いつの間にか行かなくなっていたのだが……はて、なんでだったかな？

……まあいい。思い出せないなら仕方がない。そういう時はそっとしておくに限る。

ちなみに俺の格好は普段と同じく魔導師用のローブを着ている。

鎧は……あつたことはあつたのだが、魔法の実験台に使っていたせいで腐食していたりメラメラと燃えていたりズタズタに切り裂かれたりと酷い有様だったので置いてきた。

文句を言われたらその時はその時、運がなかったという事にしよう。不戦敗上等だオラァ！

しかし、俺は肝心の事を忘れていた。

それは姫護選定の方法だとか、これからどこに行つてどうすればいいの、とかそんなちやちな事じゃない。もっと重要な事だったりする。

「やべえ、お土産忘れてた」

お土産、と言えば聞こえは軽いが要は王様への貢物のことだ。――

応顔見知りだったりするので笑って済ませてくれそうではあるが……
……ちょっと不安だ。

あとこれはついでだがこの王都、及び王城には弟達もいる。なかなか忙しいようで帰ってくる頻度がめっきり減っている。何か土産でも……と考えてはいたが……本当に考えるだけになってしまった。ちなみに四人兄弟だ。

それにしても――

「人が多いな……」

そう多い。いや、多すぎると言っても過言では無いだろう。

はじめは祭りか、とも思ってたがどうやら違らしい。道行く人に聞いてみて素直に驚いたものだ。

「昔もこんなだったっけな――ん？」

とりあえず日陰になる道端で通行人をぼーっと観察していた最中、ある物が目に入った。

紺を基調とし銀を装飾とした制服に腰には剣を佩いた二人組。おそらく騎士団の警邏だろうが……何故だ。何故こちらをじっと見つめる？

なんとなく視線を向けているところを見つめていた片割れの方が近寄ってくる。

はて、何かしたか？ それとも怪しかった？ 分からん。一体なんの用があつて俺に――

「その銀髪の綺麗なお姉さん、お茶しない？」

「……はあ？」

目の前に来て開口一番にそんなことを言い放ちやがった。

右……だれもない。

左……だれもない。

後ろ……は壁だ。

と、なるとこいつはもしかして俺にそう言ってきたのだろうか。にこにこと笑みを浮かべるその顔は女好きしそうな顔だ。黒い短髪がよく似合っている。残念とも言うべきはその両目が腐っていることくらいか。

「……俺は男だぞ。そういう趣味でもあんのか？」

「またまた〜お姉さんほどの美人が男な訳ないじゃないですか。下手な言い訳っすね……あ、もしかしてそう言って俺の気を引こうと

うぐえ……」

「触んな、ホモ」

……ハッ！　しまった、あまりに鬱陶しいからついつい足が出た。カエルが潰れたような鳴き声を上げていたが大丈夫だろうか？

「こら、お前はまたそうやって抜け出してナンパを……！　一体何度目だと思ってんだ！」

あ、やべ。片割れが引き返してきた。警邏を蹴ったら何か罪つてあつたっけか。

「う、五度目え……」

スゲー立ち上がった。なんつう根性だ……。それともやられ慣れているのか？

あー面倒だ。とりあえず逃げたほうがいいのかな。

などと思っている間にもう一方の片割れ到着。金髪ロングのチャラチャラした青年……って！

「ジェインじゃねえか！」

「え、あれ……兄貴、だよな？　ここで何やってんだ？」

なんと近づいてきた金髪ロングの青年は俺の弟のジェインだった。

ジェイン・ウォー・ヴァンレイン。ヴァンレイン家の次男で王都の騎士団に勤めている。

パツと見て不真面目そうだとか遊び人っぽいと言われる奴だが中身は意外と真面目だ。

剣の腕もそれなりにあり、将来有望と言われているらしい。（あくまで又聞き）

「やー、見つかったのがジェインでよかった。見逃してくれ」

「えっと……一応、何があったか聞いてもいいか？」

「変態に襲われそうになったんで反撃しちまったんだ」

「端折りすぎですよ、お姉さん！」

うお、完全復活。すげえ回復力だな。魔法でも使ったみたいだがそんな兆候は無かった。自力か。

「でも事実だろ。あとお姉さんとか言うな。ジェイン、教えてやれ」

「あー、ベイル。この人は一見そうは見えないけど男なんだ。俺の兄貴だ」

「嘘だ。こんな綺麗な人が男だなんて信じない！」

「ちよつと待ていジェイン。一見そうは見えないってなんだよ！　そしてお前は認めるよ！？」

実の弟にそう言われるのは少しショックだ。そんなに女々しいか俺？

「兄貴……なんで髪、伸ばしただよ？」

「髪い？ 魔力の通りがいいんだよ。文句あんのか？」

身体強化の魔法も単純な魔力精製も効果が眼に見えるほど違うなら伸ばすしかないだろう。

なんで髪を伸ばすと魔力の通りがよくなるのか自分でも不思議だが。

「兄貴は元の顔の造形が女っぽいんだから髪伸ばせばそう見えるのは仕方がないだろ」

「……つまり、俺のせいだと」

「そうです！ だから僕とこれからデートに！ ……って冗談だよ冗談！ 僕達は警邏中だし、ジェインのお兄さんは男だしね！？」

ジェインが睨みを効かせるとベイルと呼ばれた青年は慌てて口走る。

しかし、これはちょうどいいんじゃないだろうか。こいつらは王都に関して詳しいだろうからきつと姫護関係のことも聞いてるだろうし。

「そうだ、丁度いい。ジェイン、姫護の選定つてのは王城に行けば受け付けてくれるのか？」

「……姫……護……」

な、なんだこの反応。ちょっと予想外な反応が返ってきてびっくりしたんだが。

んー？ なんか悪いことでもあったのか？ 不吉な予兆だとか……そこら辺を受けて今回の姫護選定はお流れとか……好都合な展開

ですよ。それだったら美味しい。

「あ、ああ……姫護選定だな！ それなら王城に行って門番に推薦状を見せればいいぜ！ ていうか兄貴、姫護になるの？」

「なんという勇者——もごっ！？」

「勇者あ？」

姫護「勇者？ 似て非なるものだと思うが。

後その口と鼻の押さえ方はやめてやれ、息出来ないだろうから。

「なんでもない、なんでもない！ ベイルの戯言だから気にしないでくれ！」

「まあ、どうだっていいけどな！。俺は姫護にやらねえし」

「「……え？」」

再びこの反応。状況を理解していないようだ……ならば教えてやる！ この俺の『策』をなあ！

ということと勢いに任せて「かくかくしかじか……」と説明。

最初はぼかん、としていた二人だったが恐る恐るといった表情でジェインが口を開く。

「兄貴……まさか、何も知らない？」

「……………何をだ？」

一体何を言いたんだこの弟は。

「い、いやいや！ いいんだ気にしないでくれ。それにしてもすごい策だ。うん、兄貴つてば超軍師！ ……なあ、ベイル……！」

「え、ええ！？ ああ、うん、はい！ すげえ！」

ベイルがいきなり話を振られてどう答えていいか分からないように見えるのは俺の気のせいだろうか。

まあ、気のせいだろう。そう思うことにしておく。

「そうだろう、そうだろう！　ククク……、フハハ……、ハアッー
ーハッハッハッハー！」

「……楽しそうですね」

「楽しいとも！！　さーて、とりあえず城には行っとくか。んじゃまたなお前ら。警邏頑張れよ！」

二人に別れを告げ城へと向かう。

落ち着いたら城下で手頃な住処を探そうかな。こう理想的なのは隠れ家みたいな奴だな。迷路のように入り組んだ路地の先にあったり！

あ、お土産……まあ、なんとかなるだろ。

第三話 入城・書庫の精霊？

警邏中の二人と別れ、無駄にでかい城門へとたどり着いた俺は早速門番に推薦状を検分してもらっていた。

しかし、俺が推薦状を出した瞬間に信じられない物を見るような目になったのはなぜだろうか。

そんなに胡散臭かったか？ いや、仕方がない。なにせ姫護選定で現れた男が魔導師用のローブ着てたらそりや疑う。

魔法を使えば容姿なんて簡単に欺けるし推薦状の偽造なんてお手の物だろう。

おそらく偽造防止の魔法もかけてあるだろうが所詮は人の知恵。同じ人に破れないハズがない。

待ち時間が暇なので貨幣偽造防止魔法をどうこうしてしまうような魔法を考えようとした直後、城門が耳障りな音を立てて開いた。門が開き、出迎えたのは執事服を着た白髪の爺さんだった。

爺さんとは言ってもまだ現役らしく、引き締まった体躯はまだ老いを見せていない。

「久しぶりじゃねえかジジイ。まだくたばってねえとは驚いた」
「抜かせ小童が。まだまだ現役じゃわい」

この執事の名はゴロード・ギイ・アドルノ。俺がまだガキの頃、オヤジ殿に連れられて来たときにはよく世話になったものだ。

執事としての腕はもちろん一級品で、さらには武芸にも長けていた……はず。おぼろげにしか覚えていない。

そういえば俺がガキの頃といえば十年以上前。だがこいつは今と変わらないジジイだった気がする。……魔法か？ それとも健康法か？ 聞いてみるか。

「ジジイ、若さの秘訣は何だ？」

「早寝早起き」

即答かよ。ってかそんな事で若さが手に入れば苦勞はせんわ！

「教えたくないなら素直に教えたくないって言えよ」

「一日一善」

このジジイ……。

「分かったよ、もういい！　んで、俺は姫護選定の為にここに来たわけだが？」

「……晴天の霹靂と申しましょうか。正直、来るとは思っておりませんでしたわい」

「正直に飯も部屋も用意してませんって言えよ、おい」

「ほっほっほ。まだ部屋で休むにも夕食を取るにも早すぎますのう。ここは一つ、城内を見回ってはどうかと。懐かしい顔の一つや二つ会えるでしょうとも」

うつわー……こいつ認めないつもりだよ。あくまで押し通すつもりだよ。

まあここで逆らっても仕方がない。乗るしか無いか。

「へいへい。そうさせてもらいますよつと。ところで俺の他には何人集まってるんだよ？　結構いたりすんのか？」

「……っ！　ああ、まだルシア一人じゃ。まさか一番乗りとは本当に驚いたわい。……よほど姫護になりたいと見える」

「けっ、言ってる！　最後に笑うのはこの俺だ！」

俺には秘策があるんだよ……！

しかし、ジジイの反応が幾分か遅れやがったな。……まさか本当に一番乗りでビビったのか。

まあ、やる気なんざゼロなわけだが！

「（なるほど……これは面白くなってきたわい）」

「……？ 悪い、何か言ったか？ 聞き取れなかった」

「空耳じゃろう」

……ふうん？

「そうかい。あ、王との謁見はどうすんだ。報告しないでいいのか？」

「私の方から伝えておこう。どうせその様子じゃ手ぶらじゃろうしの。王も忙しい身じゃからの」

「そいつは助かるねえ。俺も丁寧な口調で話すのは苦手なんだよ」

「知っておるわい。ああ、あとあまり調度品を壊すなよ。はしやぎすぎんようにな」

「壊さんわ！！ いつまで俺をガキ扱いしてんだよ、俺はもう二十四歳だ！」

と、言う事で探検イベント発生。

しかしあんま部屋の中覗いたところで面白そうな物はなさそうだとすれば必然的に庭園や城壁の上か。いや、そういうえば魔道書の禁書を保管してる場所があったな！。そっちも捨てがたいが流石に白昼堂々是不味いか。夜だな、やるなら。

それにしても……ジジイは懐かしい顔と言ったが実は王都へ来たときの記憶は殆ど残っていない。

そこまで面白い物は無かったってことかねえ。ついでにあの頃って言ったらまだ騎士を目指してる真っ最中だった気が……そりゃ忘れたくもなるわな。

……そう考えるとあまり動きまわっても仕方がねえなあ。思い出もへったくれもねえし。

よし、どうせだし書庫に行って適当に本でも読んどくか。禁書の保管位置も知ればなおよし。

……なんだか城に来てても屋敷でやってるような事と変わらない気がしないでもない。

「よし、ここか」

かなりおぼろげな記憶で書庫への道を歩み、今ようやくたどり着いていた。

扉の真上に掲げられているプレートには『書庫』の二文字。
しかし、ずいぶんと使われていないのかホコリまみれだ。

「うへ、掃除してやれよー」

などと言いつつも自分でやるわけがない。というわけで突入ーっ
と思ったが。

ガチャガチャとドアノブは五月蠅く鳴くばかり。鍵でもかかっているのだろうか。

しかし、今更鍵を借りてくるなんて面倒なマネはしたくない。

「……まあ、こういう時の為にあるような魔法でして」

念のために周囲を見渡して人影が無いことを確認……オーケー。
俺は空間魔法で持ち歩いていた荷物の中から金細工を取り出す。
後は鍵穴に合わせて金を錬成してやればあら不思議どんな扉も――
カチリ――開けてしまえるのだ！

「それじゃあお邪魔して……あれ？」

意外や意外。外のプレートの様子からは想像もつかないほどに綺麗に掃除されていた。

埃にまみれた惨状を想像してただけに驚きを禁じえない。

「この感覚だと清浄化の魔法か。結構頻繁に使われるのかねえ」

それにもっと広い空間かと思えばそれほど広く無い。いや、狭いと言っていいほどだ。

しかもこの部屋には扉が一つ、すなわち俺が開けたこの出入口しかない。禁書の保管庫は別の場所みたいだ。至極残念。

「禁書は別の場所か。しかし参ったな……。俺はここ以外に書物が保管されてそうな場所は知らねーぞ、おい」

まあ、ここまで来てしまったんだし何冊か拝借していくか。今時の書物は無さそうだが古き良きを重んじるのもたまにはいいだろう。一番手近にあった書架に近づき適当に一冊手に取ってみる。どれどれ……

『汗濡れ女主人く支払いは体で』

「……………えつ、はあ!？」

な、なんだこれ？ これは俗に言うエロ小説って奴か。

なんでそんなモンが城の書庫に保管されてんだよ。しかも入り口に最も近い書架によ！

いや、きつと何かの間違いだろう。そうに違いない。とりあえず戻してつと。さあ気を取りなおして次に……

『恥辱勇者！私は魔王様の下僕！』

「戦えよ勇者。マゾかお前は！？」

おいおいおいおい？　なんかおかしいぞ、これ。

城の書庫ってこんなエロエロな物置いていいのか？

いや、百歩譲って置いていいのだとしてももつと奥に配置して然るべきだろう。

俺みたいな成人ならともかくガキが見つけたらどうする。まず間違いない誤った知識植えつけるぞ。

まさか……この棚全部がエロじゃねえだろうなあ。

こうなりゃヤケだ。片っ端から確認してやるか。

『村長さんやめて！　喰れた手のひらで踊る媚肉』

『淫乱女騎士！隊長の淫靡な生活！』

『鬼畜魔導師』

……………。

エロだ。マジでエロしか見当たりません、本当にありがとございました。

お、これで最後か。どれどれ……

『麗しの姫君！姫は淫乱牝奴隷！』

「ってアウトオオオオオ！　おい……王城でこのネタは不味いだろ！？　本当に誰だこいつ持ち込んだ奴は！」

床に向かって本を勢い良く叩き付ける。

本は大事にしなければならぬがこういう場合は例外だと思う、

マジで。

《……………》

「……ん？」

などと一人でやっていると思われ、耳が奇妙な音を拾う。

最初はただのノイズかと思ったがどうやら違うようだ。

《……エ……パ……》

「声……いや、テレパスか？」

テレパスは意思疎通用の魔法で離れた場所にいる人同士が会話をするために使われる魔法だ。

直接頭に響くように伝わるのだが、先ほどの俺はどうやら耳で聞いていると錯覚していたようだ。

何かを伝えたいのだろうか。ととりあえず待つこと数瞬。突如、チャンネルが合ったかのようにハッキリと伝わってきた。

《……エロガツパ》

「五月蠅いわ、ボケエ！」

……ハッ！ いきなり理不尽な罵倒を受けたのでつい怒鳴り声を上げてしまった。

ついでに拳で書架を殴ってしまった。ギシギシと軋みをあげているが……多分、大丈夫。

《……エロ乱暴者》

「う……く……なんなんだよテメエは？」

湧き上がる衝動を抑えて口を開く。テレパスの声はまだ幼い少女

のような印象を受ける。

《私は、書庫の幽霊》

「せめて精霊にしておいたほうが聞こえは良いと思うぞ」

《……………》

あ、黙った。

《私は、書庫の精霊》

「やり直すのかよ！」

《貴方が今殴ったその書架——》

「あ、ああ。悪いそんなつもりじゃなかったんだ。つい、っていうかなんていうか……」

殴ったのは流石に不味かったか？ 精霊（自称）の気に障ったのかも……

《——そこはエロ本コーナー》

「さっき知ったわ、んなこと！」

ガンガンッ！ と拳を書架へと叩きつける。

ナメてんのかこの精霊（自称）め……。

《ところで私は名乗ったのですか？》

いや、名乗ってないだろ。書庫の精霊とか胡散臭すぎるわ。まあいい。

「そいつは失礼。俺はルシア・ウォー・ヴァンレイン。魔導師だ」
《っ！ ……おや、あの有名なルシアさんですか》

「へえ、こんな放置プレイ真っ只中の書庫にまで俺の名が知れてるのは意外だ」

有名、とか言われるとテンション上がってくる。だが、

《ええ、生まれつきの騎士でありながら魔導に傾倒する変態。しかも書く魔導書のことごとくが禁書指定されるほどの変態と聞きます》

悪い意味で有名だったってオチかよ。いや、うん予想してたよ。泣いてなんかないやい！

「評判悪っ！　　というか何でも変態に結びつけんな。何処で聞いたんだよ！？」

《城の中。アーシエリアが言いふらしてます》

「……誰だ、そりゃ？　　なんでそんな知りもしねえ奴に罵倒されなきゃならんだ」

腹が立つてくる。アーシエリア、だっけか覚えてたぜその名……。

《???……本当に、知らないのですか？》

「初耳だ。なんでそんな事聞くんだよ？」

そもそも王城に知り合いなんて数えるほどなんだから知るはずも無し。

《それなら、いいです。アーシエリアに会いたいなら庭園に行けば会えるかもしれません》

「ほほう、それはいいことを聞いた。実物も知らずに罵倒するその性根を、俺が叩き直してやらあ！」

勢い良く扉を開けて外に飛び出す。……おっと、忘れてた。

来たときと同じように鍵をかけて……オーケー！

次の目的地は庭園。俺の悪い評判言いふらしているというアーシエリアとかいう奴をシメる！

第四話 入城・突然の決闘

庭園に行こうと意気込み、歩き出したところで俺は我に返った。

「庭園つて、何処だ」

書庫までの道のりは臆気ながらに分かったが、庭園までの道のりは完全に記憶にない。

仕方がないので誰かに道を尋ねようと思えるが……

「こういう時に限って誰もいねえんだよな」

こんなことなら書庫の精霊（自称）に行き方くらい聞いとけばよかった。本当に精霊かどうかすらも怪しい存在だったが……。

階段を上り下りするがそもそも外に出るルートが分からん。窓の外に芝生が見えるからいざとなれば窓から出ればいいんだが……さてどうしたものか。

さ迷い歩いていると前方の角から人影が現れた。渡りに船。声をかけるべき、なのだが……

「なんだありや。ドレスか？ 鎧か？ どっちかにしろよ」

カチャカチャと金属音を立てながら歩く人影は女性だった。金髪をポニーテールにした少女だ。着ている服は赤のドレス、なのだがところどころ金属が使われているし手甲までしている。腰には剣。騎士……なんだろうか。あんなタイプは初めて見る。しかも雰囲気からして高貴な人っぽい。ぶっちゃけ、関わりと面倒そうだ。

だが、ここで素通りしてしまうとまた無駄にさ迷うことになる。ええい、一か八かだ。

「失礼、庭園までの行き方を教えてはもらえませんか？」

精一杯丁寧聞こえるように頑張る。公の場以外では殆ど使わないから自分で言ってる違和感がある。

彼女は怪訝な表情でこちらを向いた。

「なんだ？ その程度の事は使用人にでもっ——！」

怪訝な表情が言葉の途中で驚きに染まる。

今日は良く驚かれる日ですなー、って思ってる場合じゃないね。なんで驚いてんだこの子。

別に見るからに怪しい格好ではないし、怪しい雰囲気も出してない……はず。

となると実は知ってる人だったので驚いたとか？ 少女の綺麗な顔を見つめて記憶と照らし合わせてみるが一致する物がない。初対面のはず……なのだが。

「ルシ、ア？」

「はい？」

「す、すまない。人違いだったら謝る。もしや……貴殿はルシア・ウォー・ヴァンレイン殿では？」

貴殿って、そんな呼び方するのオヤジ殿以外に初めてみた。それも女の子が。

いや、まあそれは置いておこう。肝心なのは初対面のこの子が何故俺の名を知っていたか、だ。

可能性その一、憎きアーシェリアが人相書きまで作って悪評を広めている。

可能性その二、実は俺と彼女は昔に一度会っていて俺が忘れてい

るだけ。

可能性その三、実は俺の首に賞金がかけていて彼女は俺の首を狙う賞金稼ぎ。

……まあ三は無いな。自分で考えておいてなんだが賞金首って有り得ないしな。

となると一か二？ まあそれ以外もあるだろうが……個人的には二がいいね。こんな綺麗な子と知り合っておいて忘れるなんて昔の俺はアホかと問いたいがそこはまあ気にせずに行こう。

「ああ、たしかに俺はルシアだが……何処かで会ったことありました？」

「そう、か。……ルシアか」

ん、あれ……様子がおかしい。急に俯いて若干震えているように見える。

感動……？ いや、その割には何故、手が剣へと伸びているのでしょうか？ 誰か教えて！。

こ、この震えって……まさか、武者震い？

「——ここで会ったが百年目っ……！」

「うお！？ あぶねえ……！」

一息に剣を抜刀した彼女はその勢いを殺さずに斬りかかってくる。どう見ても刃引きされてません、本当にありがとうございます——じゃねえよボケ……！

嫌な予感がしていたおかげですぐに回避行動に移れた。

一手目の横薙ぎを上体を逸らして回避。さらに身体強化の魔法を発動する。

続く喉元を狙った突きを裏拳で弾くと同時にバックステップし距離を取る。

「おいおい……俺が何をした？ とりあえず落ち着けよ。ここは城内だぜ？」

「聞く耳持たん！」

「頼むから持ってくれっととー！」

剣を下段に構えて駆け出した少女の姿を見て俺はすぐさまに反転して逃げ出す。

理不尽な暴力、超怖い。

「逃げるな卑怯者！」

「逃げるに決まってんだろーが！ というかせめて理由くらい教えてー！」

「自分の胸に聞いてみる！」

………分からん！ というかアレが誰かも分からないのにそんなの無茶だ！

とりあえず身体強化は出来ているから追い付かれる事は無いはず。後はうまく撒けばどうとでも——そう考えた直後に風切音。髪が三、四本宙に舞う。

ていうか追いついてきてるー！ 足速いし、怖い！

「剣を、出して、戦え！」

「待って、あぶつ、もう嫌だー！」

ドタドタと城内で暴れる少女（俺は逃げるだけ）。

何度か使用人や他の騎士とすれ違うが皆ぽかんとしたまま助けてくれない。しかも以外と周囲が見えているのか調度品や絵画などに一切被害を出さない。

ヤバイ。今のところ奇跡的に無傷だがそのうち怪我人が出る。俺

は物言わぬ骸になるかもしれん。

そして、考え事をしていたからか。はたまた少女が誘導したのか。俺は城内の練兵場の中央に追い込まれていた。ここには訓練中の先客が十数人いたが、今は全員おとなしく壁際で見守ってくれている。最初は俺を叩き斬ろうと意気込む少女に助太刀しようとする者もいたが……

「邪魔をするなっ！　これは決闘だ！」

という威厳ある少女の一喝でおとなしくなった。というか決闘を受けた覚えはないんだけどねー。もし先ほどまでの一方的な構図が決闘なのだとしたら俺は決闘の定義を再認識する必要が出てくる。

しかし、出口は彼女の背後。もう逃げられない上にギャラリーも興味津々で見つめている。

やるしか無いようだ。

「あー……俺が勝ったらさ、なんで襲ってきたのか教えてくれるか？」

「まだ思い出さないのかっ……！」

「ど、どうどう。忘れたのは謝るからさ……」

こ、怖い。怖すぎる。蒼の瞳にメラメラと炎が燃え盛っているように見える。

「ふんっ……いいだろう。ただ、私が勝ったら一つ条件を飲んでもらおうか」

「な、なんなりとどうぞ」

「私が勝ったら——お前にはもう一度騎士を目指してもらおう」

……なんだって？

騎士？　なんでこいつがそんな条件出すんだ？　分からん。分かんが――

「負けるわけにはいかねえな」

「……そんなに騎士になるのが嫌？」

「ああ、そうさ。騎士なんて冗談じゃない。騎士になるくらいなら死んだほうがマシだ」

「そ、そこまで言うか」

何故か彼女の気迫が揺らいだ。いや、まあ言葉の綾って奴ですけどね？

「……だが、今の軟弱なお前は見るに絶えん。せめて、魔導は辞めさせてやる」

「テメエが俺の何を知ってるか分からねえが……人の生き方にケチつけてくれるなよ」

彼女が剣を構え直す。その姿はかなり様になっていて素直にかっこいいと褒めたいくらいだ。

対する俺は落ちていた練習用の剣をだらりと握っているだけ。やべえ、重い。

練兵場の中がシンと静まり返る。

互いの隙を伺っているように見えるかもしれないが、俺は隙を伺ってはいない。

先手を取る気は無いのだ。彼女が動いてから動けばいい。

そうこうしている内に外から練兵場の中に数人が入ってくる。

場内がにわかに騒がしくなるが彼女は動かない。はて、なんで打ってこないかねえ。

疑問に思っていると入ってきた数人の内一人が突如として大声を

上げた。

「あれー！ ルシア兄さん何やってるの！？」
「ん？」

声に反応して視線を向ければそこには元気いっぱい手を振る金髪の少年。俺の弟、末っ子のエリック・ウォー・ヴァンレインがいた。

「おー、エリック！ 今決闘中だよ」

剣から左手を離して手を振り返す。その瞬間、彼女は獣のような速度で迫ってきた。

彼女の剣が振り上げられる。剣から片手を離しよそ見をしていた俺の剣は地面に剣先をついたままピクリとも動かない。

「……………くっ！」

彼女は歯噛みをするが、それでも一切の手を抜かずに豪速で剣を振り下ろす。

鉄でも断ち切れるのではと思わせるその剣は、俺の肩に迫り――
――勢い良くすり抜けた。

「――んなっ！？」

剣はそのまま地面へと突き刺さる。彼女は状況が理解出来ていないのか不自然な態勢のまま茫然としている。

そして俺は、展開していた幻惑の魔法を解除して姿を現す。彼女から見て左前、ちょうど俺が居たと思わせていた場所から3歩ほどずれた場所。

彼女はとつさに剣を抜くがしつかりと力が入っていない。

俺は左手に持った剣を一振りして彼女の持っていた剣をはじき飛ばした。

呆然とした表情でへたりこんだ彼女の眼前に剣先を突きつける。

「俺の勝ちつと……卑怯とか言うなよ？　俺は魔導師。決闘でも魔法に頼るのは当然だろ？」

彼女の表情が徐々に歪んで行く。あーあー、やっぱり怒るか面倒だなー……あ、あれ。怒……ってる？

ぽたりぽたりと地面がたちまち濡れていく。え、ちょっと待ってそれはマジで予想外で……

「……う、うわああああああん！」

だ、大号泣。ギャラリーの視線が痛い。というより殺気すら乗ってる。

いやいやいや、待たれい待たれい！　俺のせい？　いや、俺のせいしかないんだけどさ！

「と、とりあえず落ち着けて！　ほら、今回はこんな終わり方だけど次は気をつければいいだろ、な？　お、俺もちよつち大人気無かったかなーなんて反省したりするからさ！　……あーもうまた相手してやるから泣くなよ！」

「うつ……ぐすつ……ほんとう？」

綺麗な顔が涙でぐしゃぐしゃになっている。やべえ、すつこい罪悪感だわこれ。

とりあえず取り出したハンカチで顔を拭ってやる。なんか子供の世話をしているような錯覚がおきる。見た目で判断すれば十代後半

といったところだろうが……。

「マジですよ、マジ!」

「練習……付き合ってくれる?」

「と、時々なら」

「私が勝ったら……騎士だからね」

「……勝てたらな。ただ、今回みたいに泣いてくれるなよ?」

「ぐすつ……がんばる」

彼女は剣を拾うとすたすたと出口へと歩いて行く。

練兵場を出る手前で、彼女は振り返った。

燃えるような蒼い瞳で俺を睨みつける。正気に戻ったのか子供っぽい雰囲気を見せていた。

「覚えておけよ、ルシア……」

「り、了解しました」

彼女が居なくなった瞬間、練兵場の空気が一気に弛緩する。

あ、そういえば結局彼女はなんで襲ってきたんだろうか……聞くの忘れてた。

心当たりを探っている最中、エリックが近づいてきた。

エリック・ウォー・ヴァンレイン。ヴァンレイン家の末っ子。半年ほど前に王城勤務になった新米騎士だ。悪戯好きのやんちゃ坊主で良く手を焼かされたものだ。まだまだ子供なところが多いので今後の成長に期待している。

そうだ。とりあえずエリックに彼女の名前を聞いてみよう。名前があれば意外とすんなり思い出せるかもしれん。

「久しぶり兄さん! リイン様に勝つとか兄さんって本当はすごかったんだね!」

「ああ久しぶりだな弟よ。開口一番微妙な褒め言葉ありがとう。お前が今まで俺をなめてたことがよく分かった」

リン様……様をつけなきゃならんほど偉い奴だったか。
しかし、尚更分からん。全く記憶にないぞ。

「冗談だよ冗談」。でもなんで決闘なんてしてたの？ 何かやらかした？」

「何もやってねえ。ルシアだ、って言ったら襲いかかってきたんだよ。しかし……リンか。リンねえ……全く聞き覚えが無いな」
「え……」

え、何だその目は。何言っちゃってるのこの人って感じの目は何だ？

「ひょっとしてジョーク……」

「言ってるじゃない」

「……最強だね、ルシア兄さん！」

ありがとう。褒められてる気はしねえけどな。

「てめえは知ってるのか」

「むしろ知らないのはこの王都で兄さん一人だと思われます」

「マジか……それで？」

一体何者だあいつは。

「第二王女」

「……はあ？」

ダイニオウジヨ。……第二王女？

「あの人は第二王女リン・ドラグ・エルヴェディール様。『姫騎士』の名で通ってるお姫様だよ」

……………誰か嘘だと言ってくれ。

第五話 入城・庭園の暴君

俺が一体何をしたというのだろうか。

初対面（多分）の少女に喧嘩を売られた。適当にあしらったら実は姫様。

アッハッハー……笑えねえ。

ああ、とりあえず空でも見て落ち着こう。あー見事な蒼穹だ……このまま雲のように何処かへ逃げてしまおうか。

「兄さん、現実逃避しても何も解決しないよ」

く、俺を現実に戻す不屈き者が一名。そいつは俺の隣に行く我が弟エリックだ。

現在は庭園までの道案内をやってもらってる最中。持つべき物は有能な家族だ。

「エリック……人生にはな逃げなきゃやってられないことが山ほどあるんだぞー」

「たかが二十四年生きたくらいで人生を語らないでよ」

こいつ……ズバリと言いやがるな。

「それでもテメエよりは経験豊富だぜ？ 俺の経験則から言ってるという場合はとんずらすればなんとかなる気がする。とりあえずこの際だから隣国のヴェルノア王国に逃げてもいいかもしれん」

「ちよつとちよつと！ それだったら家族である僕らが責任取らせるじゃん。せめて責任取ってから逝つてよ！」

「冗談だつて……んん？」

「弟よ……気のせいだといいたが。今、イッテの言葉に込めた意味が違ったような……」

「気のせいだよ」

そうか、気のせいか。ならそういう事にしておこうか。
それにしても……。

「何で俺なんだよ……姫と接点なんて有るわけがないだろ」

「僕に聞かないでよ。兄さんが忘れてるだけじゃないの？ 昔会ったことがあってその因縁とか」

無い……とはい切り切れないのがもどかしい。確かに俺は何度か城に来たことがある。

その時に何かあったと考えるのが今のところ妥当な判断なのだが……。

「お姫様に斬りかかれるほどの何かがあったってどういうことだよ……」

「無理やり奪ったとか」

ブッ！！ ゲホッゲホッ！ 何をだ！？

「……くちびるを」

紛らわしい言い方すんな！ そして何故自分で言っておいて頬を赤らめる。この純情少年め！

「そんな命知らずなことをするほど向こう見ずだったとは思いたくない」

「兄さん……逃げてばかりじゃ前に進めないよ」

「やったとは限らないだろうが！ 決め付けんな！」

全く……善良な成年男子筆頭候補の俺になんてことを言いやがるんだこいつは。

「あ、着いた。あのアーチをくぐった先が庭園だよ。さて、僕の案内はここまでだね」

「ん？ どうせなら中也案内してくれよ。アーシエリアとかいう奴に会いたいんだ」

「……本当に、兄さんって命知らずだよな」

「そんなに褒めるなよ」

照れるぞこの野郎。

「はあ……まあいいや。骨は拾ってあげるから。じゃあね！」

「え、あつ……おい！」

俺の静止を聞かずにエリックは駆け出しあつという間に見えなくなった。

さて、どうしようか。行き方は覚えたから気を取りなおして後日という選択肢もある。これは気分の問題だ。別に、エリックの反応を見てちよつとびびつてるとかそんなことは断じて無い。

いや、待て。ここで逃げたらどうなる？ アーシエリアは次の日もまた俺の悪評を流布する可能性があるのだ。雑魚だとか下手だとか言われるのは大して気にしないが変態は嫌だ。これは気分的な問題だ。

ということ突入……したものの。

「いねえな」

一目瞭然。広い空間に噴水や色とりどりの花や草木が配置されているが見晴らしが良い。

おかげで俺以外の何者もないということがよくわかる。

「アーシェリアさん。いらっしやいませんかー」

……返事もない。これは本格的に留守かもしれん。

というかこの情報は正しいのか？ 書庫の精霊（自称）が言っていたことだしもしかしたらアレの虚言かもしれん。

しかし、そうなるといよいよ暇になったしまうな。そう自覚すると急に力が抜ける気がする。

もう部屋の用意くらいは出来ただろうか。むう……姫騎士のせいで俺の体力が限界に近い。

あんなに走ったり跳んだりしたのは久しぶりすぎた。眠い。

と、俺の視界に入ったのは庭園の外れにある大きな木。良い感じに日陰になり、地面も芝生で覆われているので昼寝には丁度いいかもしれない。

俺はふらふらと覚束無い足取りでなんとか木陰まで辿り着きバタリと倒れ伏す。

おお……予想以上に心地良い。俺はゴロリと仰向けになり目を閉じる。そして、すぐに襲いかかる睡魔に白旗をあげ、眠りへと落ちていった。

・
・
・

「
」

……………？　なんだ、この音は？

木の葉が風でざわめく音に紛れて、綺麗な音色が耳に聞こえる。なんだろう。それは何処か懐かしい響きのある音色だ。

……良く聞いてみると、それは女性の声のようだった。

「——あはっ。こんな所で眠って……相変わらずね」

懐かしい。俺の記憶には無い声だが、不思議とそう感じた。これは、夢か？

そう思うと同時に優しく髪を撫でられる感触。

「こんなに髪を伸ばすなんて……ちょっと予想外かな。女の子扱い、嫌いだったもんね？」

一体いつの話をしているのだろうか。
というか感触がある夢ってのは初めてだ。

「ふむ……まだ起きないわね。よしよし」

優しい手つきで撫でられているせいかまた泥のような眠りに落ちそうになる。

ひどく落ち着く。このままこの安寧に身を委ねていたい。

「手は……うつわ、すべすべ。ペンしか持ってませんってか、こんなにやるー」

ムニ、と頬をつつかれる感触。指でつついているのだろうか。

……………。

いやいや、待て。これは夢じゃないだろう。現実味がありすぎる。誰だ？　眠っている俺の体で遊ぶ不屈きな輩は？

「あ、やば。起きそう」

ああその通りだ、起きるぞ。今からお前の顔を拝んでやるから逃げなよ、いいな？

俺は心地良いまどろみから目を覚ますためにまぶたを開こうとした、瞬間――

「……とうっ！」

「ぐ、はあっ！」

肺の中の空気が無理やり搾り出される。何だこの衝撃は！？ マジで痛い。

そう、まるで人一人分の体重が勢いをつけて腹にのしかかったような……。

「い、一体……何が………なっ！？！？」

「あれ、どうかしたの？」

仰向けに寝ていた俺の腹の上には黒のドレスを着た美女が座っていた。

「……夢か？」

「へえ、椅子も夢を見るんだ？」

……椅子？ まさかそれは、俺のことを言ってるのか？

美女は俺を見下ろしながらニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべている。

最悪の寝覚めだ。なんだかいい感じの夢を見ていた気がするが、どんな夢だったのか既に思い出せない。寝起きのこれはインパクト

が強すぎる。

「とりあえずどけ。重いんだよ」

「椅子の分際で言うじゃない。これは不敬罪ね」

不敬罪……なんで俺が敬意を払わなきゃならんだ。

「どけ　って言ってるのが分かんねえのか？　このお転婆娘」

「……アタシに命令するなんて、アンタは何様？」

な、なんだこいつ……妙に淒味のある女だ。攻撃的な印象の赤髪と吸い込まれそうな黒い瞳のせいであじろぎそうになる。いや、負けるものか。椅子扱いされて退けるわけがない！

「ルシア様だよ！」

「ふうん……」

俺がそう言うと同時に彼女の腕が伸び、わずかに起こしていた俺の上半身を押さえ付ける。

押し倒されたような状態になって彼女の顔が近く……近く……なり過ぎだろ、おい！

甘い匂いが鼻につき、脳が痺れを起こす。呆けそうになるのを懸命に我慢する。

まるでキスでもするような距離で彼女は囁く。

「私はアンタのご主人様、アーシエリアよ？」

……ご主人様？　脳みそ湧いてるのかこいつ。……ん？　アーシエリアだと？

「さあ、それでも私に命令出来る？ 魔導師ルシア様へあははっ！」

「……『風よ』」

「へー？ ちょ、ちよっと!? ——きゃっ！」

風魔法で小規模の竜巻を作りアーシエリアを芝生の上に放り出す。重りがなくなった俺は立ち上がりロープについた埃を払う。

アーシエリアはというと俺が魔法を使ったのが予想外だったのか、はたまた別の理由かうつ伏せのまま固まっている。と、思ったらガバツと勢い良く立ち上がり俺の目の前まで近寄ってくる。言わずもがな、その瞳は怒りの業火で燃え上がっていた。

「何すんのよ、アタシはアーシエリアよ!? ルシアのくせに逆らってんじゃないわよ!!」

「ああ？ んなもん知るか。ってかルシアのくせについて意味わからねえよ猿かお前は？」

「んなつ……子供の頃はアタシの言うことに絶対服従だったくせに！ 何よ、アタシより背が高くなったからって偉そうに!!」

「……はい？ ガキの、頃？」

「なんでガキの頃の話が出てくるんだよ。俺たちは初対面だろうが」「はあ？ とぼけるんじゃないわよ。私はしっかりと覚えてるんだからね！ アンタを……ルシア・ウォー・ヴァンレインを奴隷の如く扱ってたことを!!」

な、なんだと？ どういう事だ……俺とこいつがガキの頃に知り合ってるだと？

というか奴隷って酷い奴だな、おい！

「一体いつの話だよ……」

「十二年前よ！」

騎士時代真つ盛り。

「……ああ、忘れてるわ。俺、そこら辺の記憶無いんだよね」
「え……」

無いというかおぼろげなだけだな。

だが意外や意外。記憶喪失とでも勘違いしたのかなんかしんみりした空気になり始めた。

問題はこいつの言ってたことが本当かどうかということだ。奴隷の如く扱ってたということはどう考えてもこいつに関わるとロクなことになる。

……逃げよう。相手が悪すぎる。

「全部、忘れちゃったの？」

「あ、ああ。悪いな……覚えてやれてなくて」

覚えてたらずアーシェリア関係に近づかなかっただろう。断言できる。

「うっん、いいのよ。気にしないで」

「そう言ってもらえると非常に助かる。そ、それじゃあ俺はこれで……」

自然な動作で振り返ってダッシュ！……する前にローブの裾を掴まれた。

嫌な予感しかない。振り返りたくない。

「そう、気にしないでいいのよ、ルシア。無事にアンタはここにい

て、アタシもここにいるんだから」

こ、怖い。なぜだか無性に怖くなってきた……ハッ！ まさか、これがトラウマという奴か！？

「もう一度教えてあげる。アンタは誰に従って生きるべきなのか。安心して？ 今度は忘れないように……体に刻み付けてあげるから！」

裾を掴む手を振り払ってダッシュ開始。身体強化魔法で限界まで脚力を強化！

あっという間に庭園の出入口まで到着する。追ってきてるのか気になって振り返ってみる。だが、アーシエリアはまだ木陰のところにいた。

……にこやかに手を振ってる姿すら恐ろしい。

まだ特に何もされてないけど無理だ。無理無理無理！！

心の奥底があいつにだけは関わるなと泣き叫んでる。もっと早くにその警告が欲しかった！

そうだ……俺はやっぱりあの田舎の屋敷に引き籠っておくべきだったんだ。

逃げよう。俺はそう決心して城内への道を走り抜けた。

第六話 竜虎相搏つ会食

逃げよう。そう決心したこの俺の行く手を阻む黒い影があった。

「ルシア。食事の用意が出来たぞ。王を交えての会食だ」

影の正体はゴロードだった。何処から出てきたんだこのジジイ。少し驚いた。

会食……王を交えてのか、それは断ると不味いか？

ゴロードが歩き出したのでとりあえずついて行くことにする。

「飯はありがたいんだが……王と飯を食うと息がつまりそうだな」

「口調を改めるだけじゃろ。我慢せい」

いや、それが一番の要因なんだが……。

「はあ……今度、翻訳の魔導書でも書くか。何を喋っても敬語になる感じの」

「ははっ！ 見ない内に一段とものぐさになったものじゃ。お前は昔から二言目には面倒だのだるいだの言っておったからな」

「記憶にございませんなあ」

そんな事言ってたのかよ。

「会食には姫様達も同席する。まあ、面識はあるじゃろうから問題はあるまい？」

「あー……悪い。それなんだかな？」

全く覚えてませんでした。

「なんと……あれほど仲が良かったのか」

「仲が、良い？ 会った瞬間に斬りつけられたんですけど！」

「斬りつけ……リン様か。まあ何とかなったのじゃろう？」

「何とかなってなかったら俺の首と胴は泣き別れてたと思われる」

「あの子なりの愛情表現という奴じゃな。不器用なんじゃよ」

そうか、不器用か。それならしょうがなく——ねえよな。

「不器用ってレベルじゃねえだろ！ 好感度上げることに斬りつけられてたらたまらんわ！」

「女たらしになりおって……」

「聞けよ。あとそんなしみじみ言うな。俺は女たらしじゃない」

「全く。そんなにフラフラしておるとアーシェ様と会ったときにどうなることやら……」

「……誰だよ？」

アーシェ……アーシェ……俺が知ってるのはアーシェリアだもん
な。きつと別人だろ。というか別人であってくれ。

というかジジイにとって俺の返答は本当に予想外だったのか滅茶
苦茶驚いた表情になってる。心臓は大丈夫か？

「……死んだな」

「うそ、そんなに重要人物！？」

まさか死亡宣告をされるとは思わなかった。

いよいよもって嫌な予感しかない。俺の知るアーシェリアとジ
ジイの言うアーシェとは同一人物ではなかるうか？ しかし尋ねる
勇気が起きない。肯定された日には会食に出る気力が無くなる。

「僕はてつきりアーシエ様の姫護になるために城へ来たのかと思ったのじゃが……」

姫なのかよ。というか……

「騎士にはならねえよ！」

「……？ なんじゃと？」

おっとしまった。つい条件反射で返してしまった。

「あーいや、忘れてくれ。俺はオヤジ殿に言われて来たただけでな。他意は無い」

「ふむ……まあ後悔するのもお前の勝手か。骨は拾ってガルアに届けてやるから心配するな」

……………。

「い、痛たたたた……きゅ、急に頭痛が痛くなったから俺はやっぱり故郷に帰ろうかと……」

「なあに、頑丈さが取り柄のお前に乗り越えられない苦難はない。がんばれい」

「他人事だと思いやがって酷いぞ、ジジイ！ この鬼畜執事！」

「ほっほっほっほ」

と、まあそんなやりとりをしている間についてしまったようだ。

ゴロードが一声かけて扉を開く。

綺羅びやかな装飾がされた部屋だ。あまりこういった場所で食事をした経験が無いので妙に居心地が悪い。実家のほうは割と落ち着いていた雰囲気だったからな……。

テーブルには既に二人の男女が席について談笑している。

と、こちらに気づいたようだ。

「ん……おお！ 久しぶりだね、ルシア君！」

「……お久しぶりです、陛下。壮健そうでなにより。このルシア・ウォー・ヴァンレイン、此度の姫護に名乗りをあげるべく参上致しました」

げほ……息苦しい。しかし一応公の場になるだろうから仕方がない。我慢だ。

気さくに声をかけてきたのはこの国の国王セシル・ドラグ・エルヴェディーレ陛下。見た目二十代にしか見えない不思議な人だ。

かつて俺が書いた魔導書の関係で面識があり、それ以降幾度も交流があるおかげで特に緊張はない。

彼の隣に腰掛けている穏やかな雰囲気的女性は王妃だろうか？ 覚えがないので判断出来ない。

ゴロードの誘導でテーブルにつく。はてさてこの会食、どうなることやら。

「あつはつは！ その口調じゃ息苦しいだろう？ いつもどおりで構わないよ。今日は特に公の場というわけでもない。いわば個人的に私が招待したようなものだからね」

あ、そう？ 流石は陛下。話がわかる！

「それじゃあ遠慮無く……そちらの方は王妃様？」

「ああ、自慢の妻だよ。エルゼ、この子がルシア君だ。覚えているかな？ 昔はアーシエやリインと一緒に遊んでいたのだけれど」

「あらあら、ルシアちゃん？ 覚えているわ。また一段と綺麗になつて……やっぱり髪を伸ばしたほうが似合うわねー」

王妃とまで面識があつたとは……。
というか王妃様？　もしかして俺の性別を間違えて覚えてはいま
せんでしょうか？

「一応言っておきますけど男ですよ？」

「ちゃんと分かつてるわ、安心して」

そいつは良かった。

……いや待て俺よ。これはもしかすると絶好のチャンスなのでは
無いだろうか？

昔を知るこの人達なら何故俺がリン姫に決闘を挑まれたのか、
本当にアーシエリアによって奴隷の如く扱われてたのか、教えてく
れるだろう。

「あー……陛下、アーシエリアという奴を知ってるか？」

一番重要そうな奴から。

「アーシエのことかい？」

……終わった。アーシエ＝アーシエリア。

いやまあ予想できていたといえば出来ていた。多分何の覚悟も無
くここに座っていたら裸足で逃げ出すレベルの事実だ。

ゴロードの弁を信じるならアーシエリアは王女ということになる。
正確な年齢は分らないがどう見ても第二王女よりは年上という印
象だった。つまりは第一王女か。

「やっぱりあの子のことも忘れていたみたいだね。あんなに仲良く
していたのに……いや、それを言っても始まらないか」

な、仲良く。本人は奴隷扱いしていたって言っていましたけど。

「君が城に訪れなくなってからが大変でね……姫護はいらないと言
うし、なにより男を寄せ付けなくなってしまった。もう今年で二十
六になるし少々心配で……痛たたたた!!」

何事だ!? あれ……良く見ると先程よりも王妃と陛下の間隔が
狭い気が……。

まさか足でも踏んでいるのだろうか。

「あなた? 女性の年齢をあげて物事を語るなんて最低の行いです
よ?」

「ご、ごめんなさい! 許してください!」
「反省してくださいね?」

そう言っただけの間隔へと彼らは戻る。なんとなく、理解した。王
妃様、怖い。

「……ルシアちゃんには期待してるわよ?」
「了解いたしました!!」

何を、とは聞かない。返事は『はい』か『イエス』のみだ。そんな
雰囲気。

大分得るものがあつたな。……アーシェリア・ドラグ・エルヴェ
ディール。この国の第一王女でどう見てもサディスト。

理由はよくわからないが男嫌い、そして姫護を必要としていない
ようだ。

年齢は今年で二十六らしい、さっさと結婚でもして落ち着け。そ
うすれば俺の精神も休まるというものだ。

さて次は……。

「そういえば……リイン姫に出会い頭に斬りつけられてそのまま決闘になったんだが……辻斬りの気でもあるのか？」

「リインがかい？ ああ、そういえばそんな報告を受けていたね。冗談かと思っただんだが……相手が君なら納得だ」

俺なら納得するのかよ。何故だ？

「俺は斬られるような事を過去にしたのだろうか……」

「剣の腕である子は君に遠く及ばなかった。多分それを気にしてるんじゃないかな？」

あんな鬼神みたいな奴に勝つてたとは思えんが……ああ、いや、ガキの頃の話か。

「とつくの昔に剣は捨てたつもりなんだがな」

「それも、君に固執する原因になってるかもしれないね」

……そういえば魔導を辞めさせるとか言ってた気がする。

なるほど、自分に勝った男が騎士道から外れ魔導に傾倒しているのが気に食わないと、そういう事か。

「ちなみに、リインにも姫護はいないよ。自分よりも弱い男を姫護と認めない、とね」

「へえ……その言い草だと何回か姫護選定はしたんだよな」

ぜんっぜん知らなかった。だってほら、引き籠もりだったし。

「そう、もう五度目になるかな。アーシェもリインも好き放題やるものだから回を追うごとに参加者が少なくなってるね。いやあ今回の

選定では一人も来ないんじゃないかなーって思ってたけどルシア君が来てくれて助かったよ」

「……………あ、あれ？　なんか今さらりと凄いことを言われた気がする。」

参加者が……………え？　どういうこと？

「運が良い、と言えるのかな。後はあの『三人』の内誰かに気に入られればすぐにでも姫護になれるよ」

「……………ナンデスツテ？」

い、いやいやいや！　え……………はあ！？

俺の策が……………封じられた、だと……………謀ったな！？

待て、ふざけてる場合じゃない。つまり、つまりだ……………アーシエリアかりインのどちらかが俺を姫護にすると言えば俺は姫護になるってことか！？　ん……………待て、『三人』？

そこまで思考した瞬間にパンツ！　と勢い良く扉が開かれる。現れたのはドレスを着た三人の女性。そのうち二人には見覚えがある。

「ふふつ、あの様子だから逃げちゃわないか心配だったけど……………杞憂だったみたいね」

先ほどと変わらず黒のドレスを着た美女、アーシエリアがどことなく妖艶な笑みを浮かべる。

ゾクリと背筋が凍るような錯覚。ヤバい。本格的にこいつは苦手かもしれん。

「逃亡などするはずがない。ルシアは私と約束したのだ」

赤いドレス姿のリイン。決闘の時と同じドレスに見えるが、手甲

やとところどころ付いていた装甲板が無い。脱着式か？ 無駄に手が込んでるな。

目が合った途端キツと視線が鋭くなる。泣かせたことをまだ根に持っているのだろうか。

「……………」

そして見覚えの無い三人目。何処からどう見ても成人しているようには見えない背の小さい少女だ。

水色の長い髪をツインテールにしている。同じく水色のドレスがよく似合っていて可愛い。

この子も姫なのだろうか。あ、目が合った。

「……初めまして、エロガツパ」

「なっ……書庫の精霊か、てめえ!？」

テレパスの声と同じものだったうえにエロガツパ発言ですぐに結びついた。

してやつたりといった表情を浮かべながら右手ブイサインを作ってる。てめえは悪戯娘か。

「第三王女レティア・ドラグ・エルヴェディーレです。以後お見知りおきを」

……もう何が起こったって驚かねえよ。

と、げんなりしているとアーシエリアがつかつかと近寄ってきたと思ったら俺の左腕を取って無理やり立たせる。い、一体なにをする気だ？

「お父様、お母様、ルシアはアタシの姫護にするわ。いいわよね？」

いやいや、ちょっと待ってくださいアーシェリアさん。俺の意見を聞いちゃくれませんか。

ってなんでリンさん近づいてくるんでしょうか……あ、右腕を取られた。

「姉上、残念ですが私が先約です。……そうだろ、ルシア？」

初耳だよこのやろう。頼む。後生だから離してくれ。俺は姫護に、騎士になんてなりたくないんだ。

「へえ……リン、このアタシに逆らうって言うの？ 面白い冗談ね、それ」

「私は冗談の類が嫌いです」

アーシェリアとリンが睨み合いを始めた途端に俺の腰元に衝撃。今度は何だ！？

俺の腰元に抱きつくように手を回していたのは書庫の精霊改めレティア。な、何か御用でしょうか。

「ルシアは……私の」

……何故に貴女までそんなことを仰るのか。

俺を中心に三つ巴で睨み合う横暴姉妹。

陛下と王妃は微笑まし気に笑っている。お願いですから助けてください。

姫護なんて……騎士なんて……「冗談じゃない！！」

第七話 王都脱出作戦

会食での一件はあつという間に城内に広まり、今や王都にまで届く勢いを見せていた。

曰く、三人の姫が一人の騎士を取り合っている、と……。

「冗談じゃねえよこのやろう……」

俺は騎士じゃない。と言ったところで誰も聞きやしない。

悪夢のような会食から次の日。俺はたった一人で王都を歩いていた。

時刻はちょうど昼時。あたりにはランチタイムと洒落こんでいる人が多数見受けられる。

そう、俺はこの時を待っていたんだ。

朝、与えられた部屋のベッドで目を覚ますと何処から入ってきたのかレティアが潜り込んでいても騒がず。

出会い頭から稽古だ稽古だと五月蠅いリインを追い払い。

誰に付けるつもりか分からない首輪を手に、嬉々として俺を探すアーシェリアから逃げ続け。

ようやく俺は、この時を迎えていた。

「さあ、逃げるか」

王都脱出作戦、スタート。

なるべく人の目が無い時に王都から脱出し、そのまま隣国のヴェルノア王国へと逃亡する。

出来ることなら夜中に決行したいところだが生憎と城門が閉まってしまう。王都の門もしかり。

それなら、と次善の策として昼食時に決めた。

俺は予めレティアにはアーシエリアと昼食を取ると、リインにはレティアと昼食を取ると教え二人きりになりたいから邪魔をするなと釘を刺しておいた。

アーシエリアにはリインと昼食を取ると教えたのだが……面と向かってそんなことを言えばどんな目に合わされるか分からなかった。なので、そこら辺で捕まえた若い騎士の青年に伝言を頼んだ。

彼はアーシエリアに会えるのが嬉しいのか涙目になっていたが、俺も心を鬼にすることにした。許してくれ、名も知らぬ騎士。

これで三人の姫は互いに牽制しあって俺を見逃すはずだ。完璧だ……今度こそ俺の策が役に立つ！

ククク……、フハハ……、ハアツーハツハツハッハッ！

おっと……こうしちゃいられない。何はともあれこの王都から出るのが先決だ。

……ん？ あれは……。

「——でな、——きつてばさ——」

「へえ————らず——ですね」

飲食店の店先に設置されたテーブルで談笑しているのは何処か見覚えのある金髪ロングの後ろ姿。

そいつは騎士団の制服を身につけている。ジェインだ……あのやろつ……ここで会ったが百年目だ！

近づいていくと談笑していた相手の姿が眼に入る。見覚えのある顔……というか身内だったので俺の中で遠慮するなとゴーサインが出た。

だが辿り着く前にそいつの目が驚きに見開かれる。チッ、気づきやがったか。

「あつ……ちょ、ちょっと……うつ」

俺はにつこりと笑みを浮かべながら人差し指を唇に当て黙れとサインを出す。

よしよし、良い子だ。邪魔をするなよ？

「……？　しかし兄貴も相当抜けてるよな。他の参加者なんているわけがないのにさ。でもよ、あんまり楽しそうだったから水を差すのも気が引けるだろ？　それで見送って見たら本当に姫護になりそうだしさ」

「うあ……う、うしろ……」

「は？　後ろ……？」

一体何があるんだと言わんばかりに無造作に振り返ったジェインは俺の存在に気づくとまるで人形のように固まる。抜けてる……そうか、お前は俺のことをそんな風に見ていたんだな。

「あ、兄貴……姫護就任、おめでとうございま——痛っー！！！」
「まだ決まったわけじゃねえ、よ！」

身体強化を発動してジェインの頭を鷲掴みにする。みしみし、と嫌な音が響き渡る。

「あ、兄上！　それ以上はやり過ぎです！」

対面に座っていた身内、レオニカが声を上げる。

ふむ……流石にこれ以上やると不味いか。

離してやるとぐったりとジェインはテーブルに突っ伏す。反省しろ。

「よう、レオニカ。元気でやってるか？」

「はい。兄上こそ壮健そうで何より……なんだか大変なことになってるようですが」

レオニカ・ウォー・ヴァンレイン。ヴァンレイン家の三男だが兄弟で一番の出世頭だ。

剣の腕はもちろん、学識もある。まさに知勇兼備と言えるだろう。オヤジ殿もレオニカは将来ヴァンレイン家を継ぐ子だと言っていた。俺も全くの同意見を持っていた。

「そう、そのとおりだ。全く、面倒な事になったよ」

だが、その面倒を止める手立てはあった。王都でジェインに会ったとき、姫護関係の情報を知っておけば俺は城へ行くなんて愚行をするはずがなかった。

それを問うと、ジェインは顔を押しえながら身を起こして言った。

「だってよ……こうでもしなきゃ兄貴は騎士なんてやらないだろ？」

当たり前だ。お前は何を言ってるんだ。というか何があってもやる気は無いっての。

「俺は……兄貴がもう一度騎士をやってる姿を見たいんだ。兄貴は俺の目標なんだよ……」

なっ……！？ よく覚えてるな。記憶の中だからって美化しすぎてやしないか？

「私もジェイン兄さんと同じです」

「おいおい、そりゃないだろ。買いかぶるなよ」

「事実です」

……ああ、もう。怒る気が失せたぜ。

「はぁ……まあいい。過ぎたことだしな。それに、どうせ姫護なんざやる気は無いしな」

「えっ？　どういうことだよ？」

「ふっ……聞きたいのか？　この俺の策を！　言っておくが先のよ
うなチャチな物じゃないぞ？　今度こそ完璧な手際で俺はこの王都
……いや、この国から脱出して見せる！」

「へへえ？　それであんな姑息な手段を使ったってわけ、だ。これ
はお仕置きが必要かしら？」

………？

お、おい。ジェイン？　いや、レオニカか？　どっちでもいいや
……声真似うまいなーうん。本物と聴き間違えたぜ。まさかこんな
所にお姫様がいらっしやるわけがないじゃないか。騙されないぞ、
ははっ……。

「……こっちを見なさいよ」

むっとなだに障ったような声。俺はギギギ、と音が聞こえそうなほ
どぎこちなく首を回す。

街中でも相変わらぬ黒ドレスのアーシェリア。可愛らしい笑顔
が向けられているが俺は蛇に睨まれたカエル状態。
ダレカ、タスケテ！

「ア、アーシェリア……んむっ！？」

唇を人差し指で抑えられる。い、一体何をなさる気でしょうか。

「昔のようにアーシエと呼びなさいって言ったでしょう?」

「そ、そうだったな……悪い、アーシエ」

よろしい、と頷くアーシエ。というか今気づいたが好奇の視線が多いこと多いこと。

いつのまにやらレオニカやジェインは離れたところで野次馬化している。いや、まさかそれは他人の振りか!? お兄さん、そんな薄情な弟達に育てた覚えはありません!

「この国を脱出、かあ」

「な、ななな、なんのことでしょうか」

アーシエは俺に体を近づけてつぶやく。

聞かれた……もうダメだ。俺はきつとこのまま首輪を付けられて城で幽閉されるんだ。

そして三人の姫のペットに……あ、騎士じゃないならいいかも……いや待て、流石にそれは……。

「まあ私は気にしてないけど。……どうせ無理だしね」

なんだと?

「無理だと? 一体どうして……」

「封縛の書。ふふっ……自分が書いた魔導書のせいで身動き取れなくなるなんて想像してたかしら?」

……封縛の書は俺が書いた魔導書だ。例に漏れず禁書指定とされて一般には出まわって無いはずだが……一応王城には一冊納めた。まさかそれを使って?

魔導書とはいわば魔法の指南書。あれによって習得出来る魔法は

確か……束縛の魔法だ。

「……まさか」

「試してみれば分かるけど、今のアンタは王都から一步も出ることの出来ない体になってるわ」

「王都に縛り付けたってのか？ 一体いつの間に……」

「さあ？ 別にいつだっていいでしょう。あ、でも確かめるのは後にしてよね？」

言うが早いかアーシエは俺の腕を抱きつくように取る。まるで恋人同士がするように腕を組んで城へと歩き出す俺たちを次々に人は避けていく。死ぬほど恥ずかしい。

こいつは自分の立場を分かっているのだろうか。王女だぞ王女。天下の往来でこんなこと……。

「なんで腕を……普通に歩かせてくれ。もう逃げないからよ」

「嘘をついた罰よ。今日一日はアタシに付き合いなさい。大丈夫、壊しはしないから！」

「壊さなきゃ何でもしていいと思うなよ！？ 俺にもな、手段つてもんがあるんだぜ！？」

舌噛み切って自害すんぞオラア！

「……それは困るわね。今度自殺防止の魔具でも取り寄せておかなきゃ」

「誰か助けてー！！」

割とマジで叫ぶ。冗談よ、と言って笑う彼女の笑顔を間近で見てもドキリとする。これが俗に言う吊り橋効果という奴か……。

後日、王都から出てみようとしたが束縛の魔法が発動し本当に一

歩も外に出ることは叶わなかった。

誰だこんな厄介な魔法作った奴は！

……ああ、俺か。

第八話 朝、同じベッドで目を覚ます

姫護選定のために王城へ来て早くも数日が経った。

こんな厄介なことに推薦したオヤジ殿の事を俺は絶対許さん。後悔させてやる。

不本意ながら姫護候補である俺にはある一つの悩みが出来ていた。それは絶対に似合うからと首輪を渡されたことでも、よくも騙したなと半日追い掛け回されたことでもない。

その悩みは、いつも俺が寝入った頃にやって来ている……らしい。

「ん……」

朝、窓から差し込む麗らかな日差しによって目が覚める。

……ああ、今日もまたか。

女の子特有の甘い香りと腕の中にすっぽりと入る無駄に柔らかい感触で悟る。

視線を下ろすとそこには髪を下ろしたままのレティアが身をよせていた。

「おはようございます。昨夜はぐっすりでしたね」

「……おはよう。もうすっかり慣れた自分の適応力を褒めたいよ。

……ふぁ」

あくびをしながら考える。一体、こいつはどうやってこの部屋に侵入してくるのだろうか。

そう、何故俺のベッドに潜り込んでくるのかは別としてもそこが分からないので対処のしようがない。

部屋の鍵はかけた。ここは三階だが一応窓の鍵も。念のため隠し扉の類も調べたが無かった。

しかも昨夜は扉と窓に施錠の魔法もかけたのだ。解錠の魔法でしか開けることが出来ないのだが、それも見たところ破られた形跡はない。

最初に侵入された時には本当にビビった。思わず叫びそうになるのを堪えてレティアを起こそうとしたもののこれがまたなかなか起きない。

最終的に眠ったままのレティアを抱えて部屋まで送り届けたのだが、これが不味かった。

面倒なことに俺の部屋から出てきたのを目撃したメイドがいたのだ。以降噂が噂を呼び、恋仲だとか実は婚約してる、だとか言われているようだ。

どうせ噂なのだから俺自身は大して気にしていないのだが、他の姫君は気に食わない様子だ。レティア本人はどう思ってるかは知らないが。

なんにせよ、この不法侵入姫をどうにかしなければ俺に明日はない。

日に日にアーシェの纏う雰囲気グドス黒くなってきた気がする。きつと放置しておくで首輪でつながれたペットになる。マジでそんな勢い。

俺はベッドから降りてレティアを見下ろしながら口を開く。

「さて、レティア。今日こそはどうやってこの部屋に入ってきて来てるのか教えてもらおうか」

「むう、仮にも一夜を過ごした男女の会話とは思えません。もっと気の利いたことを言ってください」

「部屋に不法侵入してベッドに潜り込んだ輩との会話としては合ってるだろうが」

「そんな……覚えてないのですか？」

何を言い出すんだコイツは。

「昨夜はあんなに激しく私を求めて来たというのに……」

「さっきお前、ぐっすりでしたねって言ったよな」

「初めてだった私の中にルシアは何度も何度もそのせ——んきゅっ
！」

とんでもないことを口走り始めたので手刀を頭に振り下ろして止める。

「アホか、お前は——」

「事実だからいいじゃないですか」

「無根過ぎるわ！ サラリと捏造すんな！」

「はぁ、本当に覚えてないなんて……」

やれやれ、とでも言うように首を横に振るレティア。

ま、まさか……本当にやっちゃったのか！？

「……なんて信じるとでも思ったか？」

「チッ」

舌打ちすんな。バレバレだから。

「別にいいじゃないですか。ちょっと責任取るくらいですよ」

「その責任は取ろうとすると首が落ちるからな、マジで」

「ルシアなら意外といけそうですね……」

なんか含みのある言い方だな。

「どういうことだよ？」

「いえ……首が落ちてても魔法で何とかしそうな感じが」

「いやいやいや、出来ねえよ！魔法にも限度はあるからな！？」

「すぐくつつければ……なんて事無いですか？」

「有り得ねえよ！」

「そうですか、残念です」

く……こんなんじゃ駄目だ。向こうにペースを握られてる。

このままじゃうやむやになってしまふ。なんとかしなければ……。そう考えていた矢先、ガンガンガン！と乱暴なノック。こんな

朝早くから誰だ！？

扉の向こうには何人かいるらしく話し声が聞こえてくる。

「姉上……ここまでする必要があるのでしょうか？」

「リイン、何を言ってるのよ。あの二人の噂は聞いてるでしょ？」

そう、これは城の風紀を正すための正義の行いなのよ！

げっ……この声はアーシェとリイン！？朝も早いっていうのに

何をしに来たんだ……？

「まあ……確かに未婚の男女が同衾とは関心しませんね」

「でしょう？と、言う事でやっちゃってちょうだい」

「あ、あのー……本当によろしいのでしょうか？」

なんだなんだ？もう一人居たのか男の声が聞こえる。なんだか

困惑しているような……。

「このアタシが命令してるのよ。さっさとこの扉をぶち壊しなさい！」

ぶち壊す！？不味い。あいつらここに踏み込む気か！

「り、了解しました。『炎よ、我が手の元に集いたまえ——』」

ぎゃー！ あの姫様方、魔法使い連れてきやがった！

冗談じゃない。このままアーシェとリインに捕まれば説教アンドお仕置きコースは確定だ。

俺のせいじゃないのに！

「はあ、何を慌ててるんですか？ ……しょうがないですね」

いつの間にか背後にはレティアがいて俺の寝間着の裾を掴んでいた。

姫様？ 現在進行形で面倒事が起きてるんですが……。

「待て、遊んでる場合じゃ……」

「騒がないください。集中できません」

……集中だつて？ 一体何のために。

そして扉の向こうでは詠唱が完了した気配。

来る。そう思った瞬間に俺はレティアをかばうように扉に背を向けて——

直後、ふかふかのベッドにボフツと音を立てて着地した。

「……………はい？」

あ、あれ？ ここは何処だ？

なんかいろいろと豪華な作りの広い部屋だ。クローゼットから化粧台、ソファーまですべてが高級感に溢れている。

「はぁ……朝から疲れました」

「疲れたって……今の、お前が？」

仰向けになっっている俺の上でレティアはぐたりと体を弛緩させる。こんな不可思議な現象は魔法しかありえないんだが……はて、コイツ詠唱なんてしたか？

「転移魔法です。あの部屋とこの部屋に予め魔法陣を仕込んでおいたの後は好きな時に行き来することが出来るんです」

「へえ……魔方阵を！」

魔方阵を描くのには普通に魔法を使うよりも魔力を必要とする。一度描けば半永久的に機能し、以降は比較的小さな魔力を使うだけで魔法が発動するというものだ。

一般的に魔具と呼ばれる物はこれを利用しているのが大半だ。ちなみに、一般大衆の殆どは少量の魔力しか持たないため、魔法を使うとなると必然的に魔具を使うことになる。

「なるほどな……転移で侵入してた訳だ。そいつは予想外だった」

まさかレティア姫が転移魔法を扱えるほど魔力を持っていたとは……。

「ん、でもこの転移魔法には欠点が一つ」

「……それは？」

「夜這いに行ったのに、疲れて眠ってしまいます」

「夜這いだったのかよ!？」

「冗談ですけど」

「ああ、そう……」

コイツの言う事は本気か冗談か分かりづらい……。

はあ……レティアのおかげで助かったといえば助かったのだが、もとはといえばコイツが部屋に侵入して来なければこんな事にはならなかったわけで……。

……って、レティア？　おい。

「すう……すう……」

眠ってる！？　あー……転移魔法で力尽きたのか？

俺は無邪気な寝顔を晒すレティアをしっかりと寝かせてベッドから下りる。

なんとなく、妹がいたらこんな感じだったのかなあと考えた。ふと、テーブルの上に開かれたまま置いてある本に目が行く。それは古ぼけた一冊の魔導書だった。

レティアは魔法に興味があるのだろうか。

「そついやテレパスも使ってたっけか。あれは書庫の中に居たのかねえ……まあいいか」

もし暇があれば、レティアに魔法を教えてみても面白そうだ。

俺は頭を掻きながら扉を開けて――。

「あら、今日はこっちだったのね……」

「まさか本当にいるとは……」

二人のお姫様と鉢合わせた。

笑顔のアーシェと呆れ顔のリン。やばい。

「違う。違うんだ、聞いてくれ」

「アンタに聞いてもまともに答えてくれないでしょう？ レティアに聞くわ」

「あ、待て。あいつは今、疲れて眠ったところで……ハッ！」

し、しまった！ この言い方じゃ不味い！

「……疲れて」

「……眠ったところ」

「と、時に落ち着け。誤解だ、誤解なんだ！」

「へえ、誤解？ じゃあレティアの部屋で疲れて眠るまで一体何をしていたのかしら？」

ひいひい……笑顔が怖いですアーシェさん！

ってリインさん？ なんで剣を抜いてるんでしょうか。俺には理解出来ない。

「……不健全な。切り落とすか」

「ナニを！？ 待ってリインさん。話を聞いてー！」

「安心しろ……一瞬だ！」

「その後は一生無いままじゃん！ 嫌だー！」

二人の間を抜けて逃亡を図る。無理だ。今の二人には話が通じない！

「リイン、捕まえて！」

「言われずとも承知の上！」

すれ違う人達の「またお前か」とでも言いたげな視線が痛い。

今日もまた、城での一日が始まる。

「待ちなさい、ルシア!!」

「ええい、止まれ! 潔く諦めろ!」

「ぎゃあああああ!!」

男としての人生は…… 今日で終わりがもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6516r/>

騎士なんて冗談じゃない！

2011年3月21日12時06分発行